

編 集 後 記

第9巻1号の旭川医科大学研究フォーラムをお届けします。本号では平成19年度に採択された「独創性のある生命科学研究」プロジェクトの研究報告を特集しました。研究代表者の皆さんには要領よくまとめていただきましたので、本号を読むことにより本学で行われている最先端の研究の一端を短時間で知ることができます。また、依頼論文2編、査読済み論文2編、エッセイ1編、JICAやDMATに関する依頼稿、学界の動向、書籍紹介、旭川医科大学回顧資料など、盛りだくさんの内容で、読み応えがあります。大変お忙しい中、執筆して下さった先生方、また、査読をご担当くださった先生方には厚くお礼申し上げます。

最近、北海道選出で大臣であった国会議員が、海外での記者会見の言動が不適切であったとのことで、大臣を辞めるということがありました。健康状態が良くなかったとされていますが、ちょっとした油断や過ちが、それまでその人が築きあげてきた全てのものを失うきっかけになるかもしれない、ということを示しています。このことは、政治の世界だけでなく、研究、医療を含むあらゆる分野に当てはまることと思います。十分、気をつけたいと思います。

(H.H)

表紙解説

プレートテクトニクス (plate tectonics) は、プレート理論ともいい、1960年代後半以降に発展した地球科学の学説。地球の表面が何枚かの固い岩板 (プレートと呼ぶ) で構成されており、このプレートが対流するマントルに乗って互いに動いていると説明される。地球は半径約6,500kmであるが、その内部構造を物質的に分類すると外から順に、地殻 (深さ約10km~30km)、上部マントル (~約670km)、下部マントル (~約2,900km)、外核 (外部コア: ~約5,100km)、内核 (内部コア) の層構造になっている。マントルは定常的に対流しており、一定の場所で上昇・移動・沈降している。プレートはその動きに乗って移動しているが、プレート境界部では造山運動、火山、断層、地震等の種々の地殻変動が発生している。(Wikipedia 参照)

このマントルの対流による、数億年単位で上昇・移動・沈降を繰り返していく地球内部各層の動きですが、その表面の薄皮一枚の上で生活を営んでいく生物にとっては、その地球活動一つ一つが「生死の境目」であるとともに、しかし、それなくしての「現在の世界 (地球) の姿」もなかったことを考えるとき、地球中心部から上昇してくるマントル (溶岩) と、共に湧き上がってくる「講座名群」の姿が見えてくるのでした。

整形外科学講座 今井 充